

[14]

氏名	劉 赫 洋 <small>りゅう かくよう</small>
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第31号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	汉语学习与日语学习中的汉字问题 ——基于“字词相通”原则的考察
論文審査委員	主査教授 沈 国威 副査教授 山崎 直樹 副査教授 玄 幸子 専門審査委員 教授 古川 裕（大阪大学）

論文内容の要旨

劉赫洋氏の博士学位請求論文『漢語学習與日語学習中の漢字問題——基于“字词相通”原则的考察』（和文題目：中国語学習と日本語学習における漢字問題——字词相通の原則に基づく考察）は、下記のように、序章、本文4章、終章と巻末の参考文献、付録から構成されており、章の下には節と項が設けられている。

序章

第一編 名詞編

- 第1章 漢語語概観及“名字語素”的考察
- 第2章 現代漢語単音節名詞的収録及問題点
- 第3章 “字词相通”連続統的“名字語素”
- 第4章 現代日語一字漢語名詞

第二編 動詞編

- 第1章 現代漢語“動字語素”概観
- 第2章 現代漢語単音節動詞概観
- 第3章 漢語“動字語素”的応用
- 第4章 日語“動字語素”概観
- 第5章 日語一字漢語動詞的応用

第三編 形容詞、副詞編

- 第1章 現代漢語単音節形容詞、副詞

第2章 現代日語一字形容詞、副詞

終章

参考文献

付録1-4：中国語自由・半自由語素対応一覧表

付録5-7：日本語一字漢語使用環境一覧表

現代中国語には、一字語（自由形態素）が1200ほどある。また同等数以上の一字の形をする拘束形態素がある（以下「形態素」を「語素」と呼ぶ）。前者は「詞」で、後者は「字」と呼ぶ。詞は構文の成分であると同時に造語の成分でもあるが、字は造語を本務としている。しかし、一定の条件下で、字も構文に加わることがある。いわゆる「字詞相通」（諸条件の下で「字」が、「詞」として振る舞う）である。中国語母語話者は、学校教育等を通じて、「字詞相通」の条件を習得するが、外国人中国語学習者にとって、その習得は最大の難関である。一方、日本語においても一字漢語は、使用上多くの制限がある。本研究は、「字詞相通」の原理を究明すると同時に、中国語と日本語において漢字一字の言語成分が語として用いる諸条件を明らかにすることにより、中国語・日本語の学習インフラの整備に繋げていこうとするものである。

以下、各部分の内容を略述する。

序章では、主に本論文の研究背景を外国人に対する中国語教育史と漢字教育研究の二つの角度から概観した。その上で、本研究の問題意識と研究手法について述べている。そして、「一字語素」を構文上顕在された自由度によって、「不活躍語素」と「半活躍語素」に分類する。本研究は、特に「半活躍語素」を考察の対象とする。最後に本研究の意義及びオリジナリティについて述べている。

名詞編は、全四章から構成されている。第一章、第二章と第三章は中国語の部分である。第一章と第二章ではそれぞれ、現代中国語における「名詞的語素」の分布状況と「一字名詞」の収録と問題点について考察している。第三章は主に「字詞相通」という連続的に分布されている半活躍「名詞的語素」に焦点を当て、その使用上の諸条件を考察している。第四章は日本語の部分である。この章では、日本語の辞典に「名詞」として見出し語に立てられた漢字を整理した上で、その使用環境を考察している。また使用上の制約の程度により、現代日本語における「一字漢語名詞」を「自由度高」「自由度中」「自由度低」の三種類に分け、それぞれの文脈的条件を考察している。

動詞編は全五章で構成されている。第一章、第二章と第三章は中国語の部分である。第一章は現代中国語における「動字語素」の分布状況を考察している。第二章では「一字動詞」の収録と問題点について考察を行っている。第三章は主に「字詞相通」という連続的に分布されている半活躍「動詞的語素」に焦点を当て、その使用上の諸条件を考察している。第四章と第五章は日本語の部分である。第四章では、まず日本の国語辞典を利用し、現代日本語における「一字漢語動詞」を確定し、その特徴を考察している。第五章は、コーパス『NINJAL-LWP for TWC』を利用し、使用環境の視点から日本語の「一字漢語動詞」を考察している。考察の結果を踏まえ、『一字漢語動詞の和漢意味対応語リスト』の

作成を試みた。

形容詞・副詞編は二章で構成されている。中国語も日本語も、形容詞と副詞は名詞と動詞の規模に大いに劣っていることから、一編の中で考察することにした。第一章は中国語の部分であり、「形容詞的語素」と「副詞的語素」をそれぞれ概観した上で、「字」から「詞」への条件を考察している。第二章では、日本の国語辞典を利用し、「形容詞」と「副詞」として見出し語に立てられた漢字を抽出した上で、それぞれ「一字漢語形容詞」と「一字漢語副詞」として使う時の分布を日本語コーパスを用いて考察している。

終章は、本論文の結論を述べる部分である。終章ではまた、外国人に対する中国語教育において、一字語研究の意義及び今後の課題について論じている。

外国人に対する中国語語彙教育において「字本位」か「詞本位」かという論争が繰り返された。しかし、以上各部分に示したように、本研究は、それと全く異なるアプローチを試みた。即ち、構文能力、コミュニケーション能力の養成という視点に立ち、漢字一字の成分について、「字詞相通」の原理に基づき、字から詞へと発展していく諸条件を考察している。研究成果は、中国語教育における漢字・語彙学習に資するだけでなく、中国語「一字語」词典の編纂にとっても基礎資料となると考えられる。中国語教育と日本語教育のいずれも漢字、そして漢字語彙の学習が重要である。劉氏の研究は中国語学習に限らず、日本語学習における漢字語教授法も意図するものである。

中国語教育における漢字学習は、漢字の量から質への発展が求められる。劉赫洋氏の研究は、正に漢字の量から質への発展を方法論的に解決しようとするものである。

以上のような問題意識に立ち、劉赫洋氏は、漢字の特質と中国語の特徴に基づき、漢字・漢字語教育の為に新しい教授法の確立に理論面と実践面から取り組んだ。

付録には、名字語素、動字語素、形容詞・副詞語素別に字詞相通対応表が収められている。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：沈国威、玄幸子、山崎直樹）は、劉赫洋氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、一）必要単位（8単位）を取得済みであり、二）博士論文のテーマと関連する分野で、論文5編（うち1編は査読有りの中国の学会誌掲載論文）、三）口頭発表4回（うち国際学会3回、国内学会1回）を有し、四）博士論文聴聞会（令和2年8月7日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることを確認した後に、研究科委員会（令和2年9月23日開催）に報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて令和2年10月29日に劉赫洋氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（令和2年11月25日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：玄幸子、山崎直樹、学外委員：古川裕）での審査に入った。

提出された中国語論文（本文 181 頁、付録 173 頁、総頁 376 頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」において述べているように、中国の『現代漢語常用字』にある 3500 字、日本の『常用漢字表』にある 2136 字を対象に国語辞書、各種データベースを駆使し、漢字一字単位の造語上、構文上の性質、分布を徹底的に調査し、綿密に検討していた。また参考文献にも記されたように最新の研究成果もふんだんに取り入れている。これらの大量の文献・資料を分析し、外国人の為の中国語漢字・語彙教育にとって効果的な教授法を求めべく実証的に研究を重ねてきた。また巻末に付されている「字詞相通」の対応表からも語彙教育に対する問題意識の正確さと研究手法の堅実さは評価に値する。劉赫洋氏の論文は、教育現場での課題に対して積極的に答えを出そうとするものであり、氏の教育者としての自覚が窺える。

本論文は、漢字教育から語彙教育へと発展させた新しいアプローチを試み、外国人学習者にとって効果的な語彙学習法を確立すべく理論と教授法の両面にわたって考察する意欲的なものである。

さらに次の 3 点からも、本学位請求論文が、優れたものであると判断することができる。

- (1) 研究の有望性：一字漢字を中心に拘束形態素が自由形態素として用いる諸条件を明示的に整理した。これによって中国語に存在する「字詞相通」の様相を明らかにした。
- (2) 研究手法の堅実さ：中国の『現代漢語常用字』にある 3500 字、日本の『常用漢字表』にある 2136 字を対象に国語辞書、各種データベースを駆使し、造語上、構文上の性質、分布を調査した。調査結果に基づいた結論も説得力がある。
- (3) 語彙教育への応用：「字詞相通」の諸条件を明示的に整理ことにより、「字本位」と「詞本位」の論争に実質的に休止符を打つことができた。語彙シラバスの編制にも寄与するものである。

以上により、劉赫洋氏の論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理等全般にわたり、所定の水準に達していることを、論文審査委員会一同が認めた。